



Title	フランスにおける諸言語のとらえ方について : 方言と少数言語の復権のために
Author(s)	原, 聖
Citation	一橋論叢, 102(2): 217-235
Issue Date	1989-08-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/11124
Right	

フランスにおける諸言語のとらえ方について

— 方言と少数言語の復権のために —

原 聖

フランスでは、一九八一年五月のミッテラン政権の誕生後、とくに翌八二年六月の文部省通達によって、ブルトン語、バスク語、オクシタン語など、いわゆる少数言語の教育が学校教育のなかでかなりの程度認められるようになった。これに刺激されてか、これまではたんに方言とみられてきたことばまでが教育の話題にのぼりはじめている。これを代表するのが、フランス北部のオイル語圏のことばであるが、ここではこれまでの方言＝言語の再考をせまるような動きもあらわれている。

ことばの価値に上下があるなかでは、彼らのことば〔オイル語〕を方言と呼ぶのは、これをさげすむことであると考えるので、もっとも意欲的な言語運動家た

ちは、ピカール語、ガロ語、ノルマン語、モルヴァン語、ポワトゥー語がりっぱな言語であると主張する (H. Giordan (ed.), 1987 (1984): 208)。

東部ブルターニュ地方のことばであるガロ語は、ブルトン語復権運動が模範となつて、七〇年代後半から急速に擁護運動が広がり、八三年五月には、はやばやと大学入学資格試験科目として正式に認められた。ブルトン語やバスク語が何十年も運動をつづけたすえにようやく獲得した地位は、ガロ語ではわずか数年で与えられたのである。とはいえ、ガロ語の統一綴字法が出版されたのはやっと八四年になってからであり (J.-Y. Baugé et al., 1984)、それでも、書きことばが完全に一つにまとまっ

たとはいがたい状況にある (A. Lefebvre, 1988: 275)。
 こうした状況をふまえ、かつ、少数言語復権を念頭に
 おいたうえで、フランスにおけるさまざまなことばをど
 うとらえたら実りある議論に役立つか、さぐってみるこ
 とにした。

一 方言否定の論理

北のフランス人と南のフランス人とをさく境界線は
 現実に存在するものではない。フランス国土のはじか
 らはじまで、わが民衆のことは広大なつづれ織りを
 なしており、その多様な色あいはあらゆるところで微
 妙なニュアンスでぼかされている (G. Paris, 1888:
 139)。

一九世紀後半のフランスで、言語学や民族学といった
 新しい学問が基盤をかためるうえで主導的役割を果たした
 博学者ガストン・パリヌ (一八三九—一九〇三年) が、
 一八八八年五月二六日、パリにおける学術会議總會での
 総括講演として「フランスのさまざまなことば」と題し
 ておこなった演説は、「当否は別にしても、フランスに
 おける方言学研究の出発点として考えられる場合が多

う」 (S. Pop, 1950, I: 45)。このなかでとくに有名なの
 が、この冒頭にかかげた個所であり、ヴァンドリエス
 はじめとして、その後の多くの言語学、方言学の基本文
 献に引用されることになる (Cf.: J. Vendryes, 1938
 (1923): 389; J. Fourquet, 1972 (1968): 188; W. G.
 Moulton, 1972: 197; Giordan (ed.), 1987 (1984): 15)。

パリスの発言の重要な点は、フランスの南北間の言語
 境界の否定、すなわち、フランス語に対するオクシタン
 語の存在を否定したことである。当時、この両者の言語
 境界の存在を前提にした研究がすでにあり、それはたと
 えば、ロマン諸語研究会 (一八六九年設立、この種の学
 会としては最初のものといわれる) のメンバーによって
 一八七六年に発表された『オック語とオイル語の地理的
 境界についての研究』であり (Pop, 1950, I: 295)、『オ
 クシタン語を文学語として再生しよう」と活動しつつあっ
 た団体「フェリブリージュ」(一八五四年設立) の中心
 人物フレデリック・ミストラル (一八三〇—一九一四
 年) によるオクシタン語大辞典 (一八七八年) であった
 が (J. Chaurand, 1985: 601)、『パリスは、こうした研
 究に対して、異議を申したたのであった。彼の真意は、

一体的実体としての方言を否定することにある。⁽²⁾

わがフランス語のように、同一起源の言語的集団においては、方言というものは現実には存在しない。実際にあるのはさまざまな言語的特徴だけであり、それがおのおの多様性からみあって地方のことばがなりたっている。したがって、ある地方のことばは、四方に隣接する地方のことばと共有する特徴ももつし、異なる特徴ももつ (Paris, 1888: 134. 傍点は原文イタリック)。

言語思想的にみると、これは、「学術的研究としての方言学の創始者」(T. Jordan; J. Orr, 1970: 36)ともくされるアスコリ (一八二九—一九〇七年) の、方言を一個の一体的な有機体とみなす考え方に對する反論といえる。じじつ、パリスはこの個所で、アスコリがフランコ・プロバンス語という概念を提示した際に (『フランコ・プロバンス語素描』一八七五年)、その書評『ロマニア』誌第四号、一八七五年) で彼を批判したポール・マイヤー (一八四〇—一九一七年) を援用している。マイヤーは「方言自体、われわれがかなり意図的にあみだした概念にすぎないのであるから、いかなる方言

といえども、自然な一体的集団とはいえない」(cit. in: R. Engler, 1980: 266) として、方言の客観的実体としての存在を否定していた。この考え方をさらにたどっていくと、地方地方のことばはたがいからみあい、混合しあうので、その境界を画定するのは不可能であると説いたフーゴー・シューハルト (一八四二—一九二七年) (『俗ラテン語の母音組織』一八六六—六九年など) と、これの一般化とみなされるヨハネス・シュミット (一八四三—一九〇一年) の「言語波動説」、すなわち、言語を水面にたとえれば地方のことばは波である (したがって、ことばの変化も波のごとく広がり伝わる) とする考え方にいきつく (『印欧諸語の親縁関係』一八七二年など) (G. Boffighioni, 1954: 375; Pop, 1950, II: 741; A. Bach, 1950: 58)。言語思想的には、このように、シューハルト、シュミット、マイヤー、パリスとつながるその歩みの上に、フランス言語地理学の創始者ジュール・ジリエロン (一八五四—一九二六年) が位置する。ジリエロンは、高等研究実習院で、彼のために設けられた方言学講座の教授となつて以来「四三年間 (一八八三—一九二六年) にわたるその教授職のあいだ、フラン

スの方言学者たちの師としてあったばかりでなく、直接にしろ間接にしろ、ヨーロッパのすべての方言学者の師でもあった」(Pop, 1950, I: 38)が、パリスから受けつぐ方言否定の論理をさらに進展させる。これがすなわち「それぞれの単語がそれ自身の歴史をもつ」という考え方である (Jordan; Orr, 1970: 170; Chaurand, 1985: 604)。有能な実地協力者エドモンの助力をもとに、一九二〇にのぼる語彙項目を、フランス全土にはば均等となるよう選ばれた六三九個所の地点で調査して公刊されることになる『フランス言語地図』(一九〇二—一〇年)が語彙項目ごとの地図からなりたっているのは、まさにこの考え方にもとづいているからにはかならない。

この手法によって、方言の一体性は雲散霧消してしまう。さらに、語彙に焦点をしばること、彼の言語地理学は、比較言語学がつかみかさねた歴史的領域をとりこむことになる。⁽³⁾そして、この連続性を中心的視点とする考え方は、形は変えながら現在にもつづいており、方言復権のための教育運動ばかりでなく、方言の認知そのものをもおびやかしている。⁽⁴⁾

二 方言意識の問題

研究史のレベルをはなれ、具体的な話し手のレベルで方言否定の論理を考えるとすれば、「方言コンプレックス」(柴田, 1958: IV)、つまり意識における問題が焦点となる。

フランスでは、方言蔑視を象徴するものとして、「パトワ」という単語がよくひきあいだされる。この単語は、「近隣の(共通語を用いる)人びとと比べて、生活水準や文化のおとっている人びと、農村で一般に人口の少ない場合が多いが、そうした人びとの用いる地域的に限られたことば」(『ロベール』)というように、否定的価値づけをともなつて定義される場合が多い (Cl.: L. Wolf, 1980: 65; 田中、ハールマン、1985: 55)。

パトワの語源はあきらかではないが、一三世紀の文献にすでに登場している (M. Aineit, 1980: 22, n. 35)。しかし、一六世紀までは、たんに理解できないことばをさし示すだけで、軽蔑的ニュアンスはなかった (A. Brun, 1946: 84)。この世紀の後半に、新しく「方言」という単語がギリシャ語から導入される(俗語での初見は一五

五〇年のフランス語文献 (Alinei, 1980: 12)°。ただし、この頃の方言というのは、おもに作家たちのあいだで使われた高級な用語であり、文学語として一般化して使うことのできる地方的なことば、という意味であった (J. Chaurand, 1972: 148-151)。したがって、中央のことばと対立関係にあることばをさし示していたわけではなかったが、一七世紀になって、この関係ははっきりしはじめると、もう一つのバトワという単語に特有の意義が付与されることになる。一七世紀末に出された辞書の定義では、「紳士のことばとは異なった、地方の野卑なことばの一種」(リシュレ『フランス語辞典』一六八九年)、「貧しい人びと、農民、子どもなどの用いる野卑で乱れたことば」(フェルティエールの辞書、一六九〇年)である (Brun, 1946: 85)。地方のことばに対する軽蔑の意識はこの頃一般化したのであり、これ以降、方言をしゃべる者たちに否定的意識をうえつけていくことになった。ここではじめて、「人びとにとって威信が最底である方言」(E. Haugen, 1972: 240)としてバトワが確立することになったのである。

さて、こうした方言蔑視の考え方はなぜ生まれたので

あろうか。これについては、オック語など地方語問題の専門家オーギュスト・ブランがたいへん明解な解答を与えた。

方言は書かれなくなると退廃する。書かれなくなると、さまざまな変種への分化がすすみ、そのうえ、いわゆる上流階級が共通語を用いはじめ、話しことばで方言を使わなくなると、その崩壊はさらにはやまる (Brun, 1946: 9)°。

現代フランスの代表的言語学者のひとりピエール・ギローも、この点ではまったく一致している。

方言の民衆的形態は、それ自身の文学と教養の伝統をたちきられ、国語と競合するとバトワとなる (Guiraud, 1968: 8)°。

ここでは詳述しないが、フランスでは、じっさいに、それぞれの地方が独自の書きことばをもっていた時期がある⁽⁵⁾。しかし、これが剝奪されることによって、方言は、権威づけの大きな柱を失ってしまったのである。

こう考えることによって、方言復権にとってはたいへん明快な方向性が浮んでくる。書きことばを失うことが方言蔑視思想を形づくる大きな要因となつたとすれば、

この蔑視思想を打破するには、ごく単純に書きことばの復興をめざせばよいのである。そして、このように、話しことばに対して書きことばの軸をたてるのが、規範意識の問題を考えることにつながる。

言語や方言をそれとして認知する理由づけとしてよくひきあいにだされるものに、話し手の意識、固有の呼び名で呼ぶその意識、というのがある (A. Martinet, 1953: vii; F. Coseriu, 1980: 107; H. Löffler, 1982: 457)。こうした言語 II 方言意識は、より厳密に言えば、ことばの規範意識として考えることができる。この規範意識は、話しことばレベルでのたんなる共有意識から、書きことばにおいて細部まで規定された規範文法への依存意識にいたるまで、段階的に考えられる (L. Wolf, 1975: 4; L. F. Lara, 1983: 169)。したがって、ことばの規範意識は、かならずしも書きことば (書かれた規範) にさええられなくても存在しうる。方言蔑視の思想は、まさに負の規範意識としてみることもできるわけであり、これが「いわば裏がえって、誇りにかわる」(E. Sapir, 1931: 126) 場合もありうる。日本で、たとえば「大阪弁の逆襲」(朝日新聞、一九八七年四月五日) などといわれる

現象はこの種のものである。しかしながら、ことばの規範のなかで、なんといっても重要なのは規範文法であり、方言においてもこれを獲得することが、その復権につながる重要なめやすとなる。この問題は、ここで、ことばの規範化、標準化の問題につながる (G.: 原, 1987)。

三 方言の定義

ここでは、言語学的な方言の定義を概略するわけにはいかない。方言否定の論理をうち破ぶり、方言復権のためにもっとも適切かが問題なのである。

数ある定義のなかで、これにもっとも有効でかつ包括的と思われるのは、エウジュニオ・コセリウの定義である (Coseriu, 1980)。彼はまず、定義としてよく「われらのように、言語と方言とは実質的にちがうわけではない」と確認するところから説きはじめる。しかし、言語と方言は、対立的概念ではなく、方言が言語に対する関係的概念である。つまり、言語という概念がまずあって、それに従属する形で方言の概念がある。さらに、こうした抽象的レベルでの定義におわることなく、彼は、歴史のなかで言語と方言のダイナミズムを考察するために、

「歴史言語」という概念を導入する。ここでいう歴史とは、長い伝統をもっていることを意味するのではなく、「歴史的に存在している」ことである。これは、歴史言語が、歴史的事情によって、いわば言語学的に決まるものであることを示している。

方言との関連で、もっとも重要な歴史的事情はといえば、それは共通語の成立である。すなわち、共通語と規範語との対比をつうじて方言が規定でき、さらに、歴史のなかでの両者の位置関係によって、方言の分類が可能となる。まず、共通語の成立時にすでにあつた方言を第一次方言と呼ぶ。これはいわば本来の方言である。つづいて、共通語の成立以降の歴史のなかで、これが（移民などをつうじて）分化してできあがつたものを第二次方言と呼ぶ。たとえば、中南米のスペイン語、米国英語、ケベックフランス語などがこれにあたる。さらに時代がすすんで、社会的文化的規範が定まると（洗練化とも呼ぶべき段階である）、標準語（コセリウはこれを模範語 *Konplariache* と呼ぶ）ができあがるが、これも各地に広がるなかで、地域的相違が生じてくる。これが第三次方言である。コセリウによれば、マドリードの模範スベ

イン語に対するアンダルシアの模範スペイン語がこれにあたる。

このように方言を考えると、たとえば、ある方言が規範語（共通語から標準語）の道をあゆむことになれば、その方言は言語（歴史言語）という地位を獲得することにつながる。ガリシア語がいまでは一個の言語とみなされはじめているのはこの事例である（以上、Cosertini, 1980: 108—109, 111, 113—114, 222）。方言から言語への変換のダイナミズムをもつこの理論が、方言復権の道を示していることはあきらかであろう。

ところで、こうした方言の歴史的分類は、コセリウがはじめておこなったわけではなく、すでにサビアが示唆していた⁽⁶⁾。

昔からの方言の場合には、標準語との関連はたいへん薄い⁽⁶⁾が、ニューイングランド米語や中西部米語のような地域語の場合には、標準英語（ここでは厳密に定義を考へる必要はない）は、こうした地域語の話し手にとって、当然の背景として頭のなかにはいつている。したがって、このような地域語は、歴史的には言いまわることのできないかもしれないが、心理的には中心的

規範ないし標準規範の変化したものと見える (Sapir, 1931: 124)。

サビアは、さらに、方言運動に言及する。すなわち、スイスドイツ語やヨークシャー英語などは、標準語との関係が薄いため(コセリウの第一次方言である)、言語認知要求運動が成立しうる(「自分の地域の方言によってたつて、民族主義的信条をうちたてる」(同所)と彼は表現する)。しかし、アメリカ中西部英語などの場合、標準語と少なくとも心理的に結びついた密接な関係ゆえに、これがほとんど考えられない、と説明するのである。ただし、「どんな社会的事象でもふつうにみられるが、こうした問題で重要なのは、歴史の客観的事実よりは、むしろ心的態度を象徴的に表わすことである」(同所)と指摘し、間接的ではあるが、集団的意志が整えば、第二次方言のような場合でも、言語運動を形成しうることまで暗示しているのは、慧眼といふべきであろう。

ハウゲンは、コセリウとほぼ同じ時期に、三種類の方言の区別を示した。彼の場合は、コミユニケーションにおける社会的影響力が尺度で、歴史的というよりも原理

論的で、そのうえ話しことばがその対象である。第一は、近隣の村むらのあいだの交流のなかでできあがる農村方言、第二は、都市の形成とそのなかでの農村方言の混合によってできあがる都市方言、第三は、国家的まとまりのなかで、上流階級が中心となるエリート方言である (E. Haugen, 1982: 3)。彼の分類では、規範のレベル(書きことばにつながらる)が考慮されていないので、コセリウの場合のような、方言から言語へのダイナミズムは、この枠内では描くことができない。これはまた、次に述べる、社会階層的機能分化にかなりの程度つながっている。

コセリウにおいては、まさにこの機能の問題が重視される。方言は言語と実質的に変わらないのであるから、話し手にとっては一個の完結した体系である。言語共同体にとつても、それは理念的には同じなのであるが、ある方言が特定の社会階層のみで使われるような場合には、その方言は、限定された社会階層的機能(コセリウはこれを言語水準と表現する——いわばことばの生活水準である)をになうだけで、全体性を失ってしまう。さらに、こうして社会階層的に限定された方言が、使用場面で、

たとえば、うちとけた場面での使用に限定される場合がある。この場合、方言は特定の言語スタイルとして機能するにすぎない (Cosertu, 1980 : 112)。

ハウゲン は、こうした社会階層的機能を、方言の定義そのものに含めたので、方言というのは完全な体系とはいえない、とコセリウに反論したことがある (Haugen, 1980 : 116)。現代における共時的な現実として方言を観察すれば、社会階層的に限定された機能をになっているのかもしれない。コセリウが強調するように、言語と方言は、ことばとして本質的に異なるわけではない。だからこそ、方言から言語(またその逆)への変換が、歴史的におこりえるのであり、定義としては、こちらの方がはるかに包括的といえる。

ところで、コセリウが提起した機能的限定化の問題は、社会階層的機能のレベルでは、社会階層を尺度とする社会方言が問題となるし、使用場面での機能においては、形式化の度合を尺度としたことばの使用目録(スタイルとか文体)の問題と考えることができる。一方、本来の方言それ自体は、地域を尺度とする空間的変異が問題となり、時代を尺度とすると、時間的変異、すなわち、歴

言語変化の見取り図

	変 化 軸	変種の種類	尺 度	事 例
規 範	空 間	方 言	地 域	バリ方言, 北フランス方言…
	時 間	歴史段階	時 代	古期フランス語, 中世フランス語…
機 能	社会階層	社会方言	社会階層	上層方言, 下層方言…
	使用場面	ことばの使用目録	形式化の度合	公式的(文字フランス語, 洗練フランス語), 非公式的(民衆フランス語, 家庭フランス語)…

史段階を区分することができる。そして、この二つは、規範の生成に深くかかわっている。このように、概略的に、方言を中心とした言語変化の見取り図を图表化すると、いまでは上のようにまとめられる。こうして、方言は、まず、規範語の成立との関係で三種類に区分でき、さらに、言語変化のなかでの規範の生成と機能的限定化について、それぞれ二つの尺度から分類を考えることで、方言とそのほかの変種との位置関係をとらえることができ

る。

第一次方言の場合は、長い歴史をもっている、それぞれの方言について、それぞれの歴史段階、社会方言、ことばの使用目録を考えることができる。たとえば、パリ方言についてみると、時代的には、中世、現代などの、社会階層的には、上層、下層などの、形式化に関しては、洗練された、ないしは民衆的等々それぞれのバリ方言を思い浮べることが可能である。そして、こうした長い歴史をもつ方言の復権を考えるにあたっては、規範のレベルでは、高レベルの規範、すなわち書きことばに規範文法を生み出すことが、ガロ語の場合のように、十分可能なのであり、機能のレベルでは、ハウゲンのいうように、通常、階層的にも使用場面においても限定化されている場合が多いわけであるから、これを脱し、全面的な機能を回復する方策をさぐるものが課題となる。

第二次第三次方言の場合には、成立から歴史があさく、機能のレベルではじめから限定化されている場合が多いので、言語運動は、第二次方言の一部(たとえば、インド英語、メキシコスペイン語、ケベックフランス語など)を除けば、サビアのいうように、成立しえない場

合が多いであろう。

少数言語についてみると、そのあり方は第一次方言とたいへん類似しているということが出来る。最後に、この少数言語との関連で、方言を観察してみることにする。

四 少数言語と方言

地域的な方言は、ある意味では少数言語であるが、この少数言語という言い方は、ある国家の領土内で暮らす少数民族が用いる、まったく異なった形態のことばをさし示すためにとっておく方がよからう(Sapir, 1931: 124)。

サビアがいうこの場合の少数言語とは、例としてバスク語とブルトン語をあげることからわかるように、彼のことばでいうと、ある国家のなかで、国語と「歴史的に区別できる言語」、一般にわかりやすくいえば、言語それ自体に接して、だれがみてもはっきりちがうとわかる種類の言語である。すべてがこうであれば、少数言語か方言かなどと議論する必要はないが、少数言語のなかには、これが論争の対象となっているものも少なくない。こうした場合には、各種の概念装置を配備して、精

密な分析をおこなうことが必要となる。

これについては、ハインツ・クロスがたいへん有益な考察をおこなっている。彼は、まず、言語や方言を分類するに際して、「へだたり」Abstandと「拡充」Ausbauの二つの概念をたてた。この二つは設定の次元が異なり、対立するものではけっしてない。へだたりは、いわば純言語学的な基準である。一方、拡充の方は、「人の手が加えられた度合」が基準となるので、社会学的にも言語学的にも問題となる(H. Kloss, 1976: 301, 303; 田中ハールマン 1985: 77)。へだたりが歴史的な結果だけを、しかも言語だけを対象とするので(へだたり方言という言葉い方はできない。へだたっていれば一個の言語である)、補助的な概念であるのに対し、拡充は、歴史的過程そのものが対象となる重要な概念と考えられる。

拡充の過程は、ことばの標準化過程と置きかえてもよく、当然ながら、言語内的にも言語外的にもすすめられる。この過程が、いわば全面展開するのが「拡充言語」である。高レベルの規範(規範文法)と全面的機能をもつ言語は、すべて拡充言語と考えてよい。

この拡充言語を一方の端とする連続体を考えると、も

う一方の端にくるのが「ふつうの方言」である。ふつうの方言とは、言語学的にも社会学的にも、たんなる方言であることに疑念の余地がない場合である(Kloss, 1976: 32—315; 1978: 56。コセリウの三分類等、前章での論議を考えると、この言い方はやや精密さに欠けるように思われる)。

この両者の中間にくるのが、「拡充方言」である。⁽⁸⁾ 中間にくるゆえに、クロスは、以前は、これを「半分言語」Halbspracheと呼んでいたが、「半分」は「中途半端」につづるゆえに、こう変更したのであった(Kloss, 1978: 57)。拡充方言は、人の手の加わる事実において、すでにふつうの方言とは区別されるが、その度合において、全面展開にまでいっていないゆえに、拡充言語とはいえない「段階」にある。規範のレベルでは、従属的規範意識をもつ場合であり、上層規範||標準語が別に意識されている。機能のレベルでも、全面的機能を保持していない段階にとどまる。クロスは、スイスドイツ語やルクセンブルク語を例にあげる。ガロ語やピカル語など、フランスにおけるオイル諸語の復権運動は、こうした拡充方言のカテゴリーにはいる問題であろう。

このカテゴリーのことばは、方言とみるか言語とみるかたいへんゆれやすい。それは、ふつうの方言と拡充言語を両端とする連続体のなかで、規範・機能両面での受けとり方が、話し手や研究者それぞれで異なるからである。オイル語の場合、当事者である言語運動家の多くは、これがりっぱな言語であると主張するのに対し、オイル語以外の、いわゆる少数言語の運動家やジオルダンなどの研究者からは、フランス(標準)語を中心としてたがい存在を認めあう共存関係がそこでは問題となり、少数言語の運動とは次元が異なる、といった主張がでるのは、右のような理由から説明がつく(Gjordan (ed.), 1987 (1984): 208—231)。

クロスは、この拡充方言に関連して、拡充がなんらかの事情でゆがめられ(ないし制限され)てしまう状況について、二つの概念を提示した。これはともに、言語接触の場面が問題となっている。

一つは「屋根なし外部方言」*daachlose Außenmundart* と名づけられる概念である。以前は、たんに「屋根なし方言」と呼んでいたが、もともと屋根がないと誤解される場合もあって、「外部」をつけ加えたのであった(Kloss,⁽⁹⁾

1978²: 60)。彼自身、フランス語では、「さらしもの」方言「*dialecte exposé*」と訳しているように(Kloss, McConnell (eds.), 1974: 33)、「もとはふつうの方言であったものが、政治的変動によって、上層規範(書きことば)から切断されてしまった方言をさしている。したがって、「屋根喪失方言」とでも訳した方が、内容的にはふさわしい。こうした方言は、上層規範の束縛からときはなたれ、さらに、あらたな政治体制のもとでの、まったく異なった上層語Ⅱ国語からの強力な影響をこうむるので、言語変化の度合は大きい。

クロスは、こうした屋根なし方言の事例として、フランスに関しては、フラマン語、フランク語、アルザス語、コルシカ語をあげる。

クロスのもう一つの概念は、「一見して方言化された言語」*scheindialektalisierte Sprache* である。⁽¹⁰⁾この場合には、高レベルの規範をもつ言語どうしの言語接触が問題となる。彼は、オクシタン語を事例の一つにあげている(Kloss, 1978²: 68)。すなわち、この言語は、中世においては、書きことばをそなえたりっぱな言語であったが、フランス語が上層言語となると、階層的な限定化

がすすみ、また、書きことばとしての使用も制限される(二重の機能的限定化)。こうした従属的な言語接触がさらにすすむと、ついには、フランス語の方言にすぎないのではないかとみられるほどにまでいたってしまうのである。第一章でとりあげた方言否定の論理は、この視点をさらに究極的におしすすめたもの、と考えられる。

このように、「一見して方言化された言語」現象が生まれるには、へだたりの度合の小さい拡充言語が隣接して成立し、その後、一方が他方の侵入を受ける状況(社会的上下関係)がなければならぬ。ドイツ(文章)語に対する低地ドイツ語がこの例であるし、カタラン語もスペイン語に対してこうみられる場合がある(Martinet, 1954: 8)。おそらく、現代における琉球語の状況も、これに含めて考えてよいであろう。

ちなみに、拡充言語がたがいに対等な立場で交流をすすめる時、そこに生まれるのが、「多極的上層言語」*pluricentrische Hochsprache* である。たとえば、今世紀はじめのノルウェーでは、リクスモールとランスモールが別個の言語であることはだれも疑わなかったが、両言語の教育の進展と対等の交流の深まりのなかで、いま

では一つの言語の二つの形態と感じられるまでになっている (Kloss, 1967: 33)。

むすびにかえて

フランスにおける諸言語のとらえ方について、個々の事例をまとめておこう。

バスク語とブルトン語はへだたり言語であり、少数言語と認知するにはまったく支障がない。ただし、それぞれの言語のなかで、深刻な方言分岐の問題をかかえている(これは標準化論で検討できる)。

カタラン語は、かつてはスペイン語に対して、一見して方言化された言語であったが、カタルーニャ自治政府の言語政策、教育の進展によって、いまではりっぱな上層言語となっているといえる。しかし、フランス国内のカタラン語圏では、ほかの少数言語の場合と同様、二重の機能的限定化に終止符がうたれていない。

オクシタン語はいまでも、一見して方言化された言語である。言語運動家の多くは、規範化(辞書、文法、出版、教育)の進展にもとづいて、上層言語の存在に自信をもっているが、たとえば、フランス政府は、オクシタ

ン語という標準語の存在を認めず、「方言が多様である」ゆえに、学士号なども認めていない。また、話し手のあいだでのバトフ意識がいぜんとして非常に強いのもこの言語である。

コルシカ語は、文法書辞書の出版、教育の進展など、拡充の度合はかなり進んでおり、クロスのことばでいえば、屋根なし方言の段階を脱して、「あらたに上層言語とならんとしている最新の事例」(Kloss, 1978²: 63)である。

アルザスでは、伝統的な上層規範(ドイツ文章語)に対する忠誠意識が現在でも非常に強く、言語教育運動においても、ほぼ一致して、書きことばとしてのドイツ文章語、話しことばとしてのアルザス語の両方を、アルザスの地域語として認めるよう要求している(Gortan ed.), 1987 (1984): 66)。したがって、アルザス語は、今後とも屋根なし方言の位置にとどまりつづけ、ドイツ(文章)語の使用の拡大と、それへのアルザス的要素(語彙、言いまわし等)の付加という形で、その独自性が主張されていくであろう。

これに対して、フランク語の場合には、言語的に近い

ルクセンブルク語が、拡充方言として公用語の地位まで獲得している事情があるので、ドイツ文章語に対する規範意識はうすく、ルクセンブルク語を参考にしながら、みずからの話しことばの規範化が模策されている。

オランダ語とベルギーのフラマン語とのあいだでは、双方の対等の立場での標準化であるネーデルランド共通語が広まりつつあるが、フランス国内のフラマン語圏では、これを採用するよりは、むしろ、自分たちの屋根なし方言を育てていこうとする指向性が強いようである。

とはいえ、その言語運動はまだ脆弱であるゆえに、めざすべき方向が定まっているとはいえない。

オイル諸語の復権運動は、第一次方言の拡充運動である。ガロ語は、ブルトン語との言語接触のなかで影響を受け、それが独自性を生みだす要因の一つとなっている。この言語は、はじめに述べたように、オイル語ではもともと認知のすすんだ言語であるが、辞典が出版されていない(八〇年代はじめからその準備ははじまっている)など、運動はまだまだその初発段階にとどまっている。

オイル語のなかでは、このほか、ピカール語、ノルマン語、モルヴァン語、ポワトゥー語で教育運動がはじま

っており (Défense et promotion des langues d'oil, 1983)。「こうした言語の数は、今後もふえるであろう」(八四年三月、パリで開かれた少数言語問題討論会でのアンリ・ジオルダンの発言)。

フランスの諸言語が語られる時かならず話題にのぼるものにも、もう一つ、フランコ・プロヴァンス語というのがある。この言語は、フランス語とオクシタン語との中間的言語圏の名称として、アスコリがいわば純言語学的に提唱して以来、いまにひきつがれて語られるのであるが、言語擁護運動にはあらわれない言語である。なぜかといえ、それは、研究者の一方的な限定にもとづくので、地域としての一体的な歴史的経緯がそこにはないからである。言語運動をもつ(まだまだ弱い)ものとしては、サヴォワ語が、純言語学的名称のフランコ・プロヴァンス語に含まれる。サヴォワ地方は、独自の伝統(歴史的一体性)をもっており、したがって、当事者の言語的規範意識がそこに働いている。

これらはいずれも、それぞれの地域にねざした土着の言語であるが、フランスでは、これ以外にも、少数言語として現在認知されつつある言語が存在する。話し手の

大多数が都市に居住するゆえに、地域にねざしたとはいえない一連の言語群がこれにあたる。外国語として認知されず、どこの国の国語でもない言語は、すべてこれに含めて考えられつつある。代表的なのは、ユダヤ人の言語であるイディッシュ語やユダヤイスペイン語、ジブシ語、ベルベル語、ソニンケ語(ブラック・アフリカの言語では、フランスでもっとも話し手が多いといわれるが、どこの国の国語でもない)などである(G. Verbunt (ed.), 1985; G. Vermes (ed.), 1988)。これらの言語は、どの場合も、フランス語とのへだたりの度合いは大きく、言語としての認定については、なんら問題がない。

言語は、サビアの指摘をまっまでもなく、集団が連帯意識をもつうえで、最大の役割∥象徴機能をはたす。それは、民族や国家といった、異質なものを理念的に排除するような大集団につながる場合がこれまで多かったが、いまではこれがだいぶ色あせて、より小さな集団で、しかもたがい排他的でも従属的でもない重層的レベルで、その存在が主張されはじめている。

(1) 当時は、le provençal が南仏のことには対して総称的に使われた。その後、j. Roumat など一部の、しかし

著名な南仏語学者がこれを使ったため、S. Pop (1950, 1: 277—278) などもこれを受けつぎ、現在でも、書目分類などではこの用法が残っている(日本でも同様)。しかし研究者のあいだでは、標準語としてのオクタン語(フランス語に対応)、方言的総称としてのオック語(オートル語に対応)が定着しつつある。Jordan, 1987 (1984): 143; 田中・ハールマン 1985: 124—126。

(2) ただし、プリスは「文学とらう専門分野でのオクタン語の意義を否定してらるわけではなく、これを一個の言語と考えることに反対してらる。Paris, 1888: 134—135。

(3) メイエがジリエロンらの手法を言語地層学と呼んだのは「まさにこの歴史的側面ゆえである。Jordan; Orr, 1970: 153, n. 2。

(4) こうした方言否定の論理は、現在では「連続体 Continuum 論」また「やや様相を交えつつ」交種 Variety 論のなかでみられる考え方である。そしてあたり「Ch.-J. Bailey, 1980; Chambers; Trudgill, 1980; K. M. Petyt, 1986 (1980) など」を参照。

(5) 詳細については「A. Nouvel, 1977; Marchello-Nizia, 1979」などを参照。

(6) マルチネも似かよった方言分類をおこなっている(コセリウは参考文献の一つにあげている)。彼の場合は「コセリウの第一次、第二次方言のみの指摘であり、第三次方言(標準語の地域的形態)は、ギリシヤ語のように、特別

に長くかつ持続的な歴史をもつ例外的な場合だけとする。Martinet, 1954: 4. サビアについては「コセリウもマルチネもなんら指摘していない」。

(7) H. Berschin et al., 1978: 15の図を多少変更して採用した。なお「この考え方のうちの三つの尺度(時間、空間、社会階層)は「コセリウなどによれば、ノルウェーのロマン語学者レイフ・フリダルがはじめて提起したという。Cosertiu, 1980: 111; K. Heger, 1982: 428. これはかなり異なった図式を提案している研究者もいる。たとえば「P. Wiesinger, 1980: 182, 186; J. Goossens, 1977: 10; H. Niebaum, 1983: 2。

(8) これに対して「ハラルト・ハールマンは「これとはほぼ同一の事象について「文化方言」という概念を提起した。Haarmann, 1972: 312. 田中・ハールマン 1985: 83. その基準は「書きことばの歴史的な有無にあるが、書きことばを文化という概念につなげる考え方は、説明概念としては「まぐな」と思われる。

(9) 田中・ハールマン 1985: 47, 54, 57では「クロスの用法として「屋根なし言語」(傍点筆者)とらう表現がひきあいだされ、公的な地位を与えられていない言語「いわゆる少数言語をさして使われているが、これは著者らの独自の発展的解釈である。

(10) クロスは「scheinendialektalisierte Abstandsprache」としているが、この場合の「たたりは、事例からみわかるよ

ルビノ、拡充の結果生じたものから、そのうちいくつかの
など、語彙的なもの、ルビノが彼の用語を整理した。
田中 文雄

ALINEI, Mario, 1980: "Dialect: A Dialectical Approach," in: J. GÖSCHEL et al. (eds.): 11—42.

BACH, Adolf, 1950²: *Deutsche Mundartforschung*, Heidelberg, C. Winter.

BAILEY, Charles-James, 1980: "Conceptualizing 'Dialects' as Implicational Constellations rather than as Entities Bounded by Isoglossic Bundles," in: J. GÖSCHEL et al. (eds.): 234—272.

BAUGE, Jean-Yves; MACOT, Thierry; MOTROT, Laurent, 1984: *Graphie unifiée interdialectale pour une langue bretonne romane moderne*, Saint-Nazaire, Imprimerie spéciale "Aneit".

BERSCHIN, Helmut; FELIXBERGER, Josef; GOEBL, Hans, 1978: *Französische Sprachgeschichte*, München, M. Hueber.

BESCH, Werner (ed.), 1982: *Dialektologie*, vol. I, Berlin, de Gruyter.

BOTTIGLIONI, Gino, 1954: "Linguistic Geography. Achievements, Methods and Orientations," *Word*, vol. 10: 375—387.

BRUN, Auguste, 1946: *Parlers régionaux. France dia-*

lectale et unilé française, Paris, Didier.

CHAMBERS, J. K.; TRUDGILL, Peter, 1980: *Dialectology*, Cambridge U. P.

CHAURAND, Jacques, 1972: *Introduction à la dialectologie française*, Paris, Bordas.

CHAURAND, J., 1985: "L'essor de la dialectologie," in: ANTOINE, Gérard; MARTIN, Robert (eds.): *Histoire de la langue française, 1880—1914*, Paris, CNRS: 601—604.

COSERTU, Eugenio, 1980: "'Historische Sprache' und 'Dialekt,'" in: J. GÖSCHEL et al. (eds.): 106—122.

DÉFENSE ET PROMOTION DES LANGUES DOIL, 1983: *Les langues doit et béole*, Lille, Imprimerie Véré.

ENGLER, Rudolf, 1980: "Linguistique 1908: un débat-clief de linguistique géographique et une question de sources saussuriennes," in: KOERNER, Konrad (ed.): *Progress in Linguistic Historiography*, Amsterdam, Benjamine: 257—270.

FOURQUET, Jean, 1972 (1968): ("Langue - Dialecte - Patois," in: *Le langage*, Encyclopédie de la Pléiade: 571—596), 田嶋英昭「言語—方言—語種」『言語の整理』皇学国語学会。

GIORDAN, Henri (ed.), 1987 (1984): (*Par les langues de France*, Paris, Centre Georges Pompidou) 原野監『郷

- たふたふ記述の復讐』筑波社。
- GÖSCHEL, Joachim; IVIČ, Pavle; KEHR, Kurt (eds.), 1980: *Dialektologie (Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik, Heft 26)*, Wiesbaden, F. Steiner.
- GOOSSENS, Jan, 1977: *Deutsche Dialektologie*, Berlin, de Gruyter.
- GUIRAUD, Pierre, 1968: *Patois et dialectes français*, Paris, P. U. F.
- HAARMANN, Harald, 1972: "Die Sprachen Frankreichs. Soziologische und politische Aspekte ihrer Entwicklung," in: *Festschrift Wilhelm Giese*, Hamburg, Buske: 295—340.
- 原野' 一九八七「少数言語と多文化の複雑語彙と文化」『橋論叢』第九七卷第六号「九六一—一六〇」
- HAUGEN, Einar, 1972: "Dialect, Language, Nation," in: id.: *The Ecology of Language*, California, Stanford U. P.: 237—254.
- HAUGEN, E., 1980: [Diskussion] in: E. COSERIU, HAUGEN, E., 1982: *Scandinavian Language Structures. A Comparative Historical Survey*, Tübingen, M. Niemeyer.
- HEGER, Klaus, 1982: "Verhältnis von Theorie und Empirie in der Dialektologie," in: W. BESCH (ed.), vol. I: 424—440.
- JORDAN, Iorgu; ORR, John, 1970: *An Introduction to Romance Linguistics. Its Schools and Scholars* (revised, with a supplement: *Thirty Years On*, by R. Posner), Oxford, B. Blackwell.
- KLOSS, Heinz, 1967: "'Abstand Languages' and 'Ausbau Languages,'" *Anthropological Linguistics*, vol. 9, n. 7: 29—41.
- KLOSS, H., 1976: "Abstandsprachen und Ausbausprachen," in: GÖSCHEL, Joachim; NAIL, Norbert; VANDER ELST, Gaston (eds.): *Zur Theorie des Dialects (Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik, Heft 16)*, Wiesbaden, F. Steiner: 301—322. (備記表語彙文化學大槪と種々)
- KLOSS, H., 1978²: *Die Entwicklung neuer germanischer Kultursprachen seit 1800*, 2., erw. Aufl., Düsseldorf, Schwann, (1. Aufl. 1952).
- KLOSS, H.; MCCONNELL, G. (eds.), 1974: *Linguistic Composition of the Nations of the World*, vol. I, Québec, Pr. de Univ. Laval.
- LARA, Luis Ferrando, 1983: "Le concept de norme dans la théorie d'Eugenio Coseriu," in: E. BÉDARD; J. MAURAIS (eds.): *La norme linguistique*, Québec: 153—177.
- LEFEBVRE, A., 1988: "Les langues du domaine d'oïl," in: G. YERMES (ed.), t. I: 261—290.

- LÖFFLER, Heinrich, 1982: "Gegenstands Konstitution in der Dialektologie: Sprache und ihre Differenzierung," in: W. BESCH (ed.): 441—463.
- MARCHELLO-NIZIA, Christiane, 1979: *Histoire de la langue française aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris, Bordas.
- MARTINET, André, 1953: "Preface," in: U. WEINREICH, *Languages in Contact*, The Hague, Mouton.
- MARTINET, A., 1954: "Dialect," *Romance Philology*, 8: 1—11.
- MOULTON, William G., 1972: "Geographical Linguistics," in: T. A. SEBEOK (ed.): *Current Trends in Linguistics*, The Hague, Mouton, vol. 9: 197—222.
- NIEBAUM, Hermann, 1983: *Dialektologie*, Tübingen, Niemeyer.
- NOUVEL, Alain, 1977: *L'occitan, langue de civilisation européenne*, Montpellier, chez l'auteur.
- PARIS, Gaston, 1888: "Les parlers de France," *Bulletin historique et philologique du comité des travaux historiques et scientifiques*, n. 3—4: 131—147.
- PETTYT, K. N. 1986 (1980): "Other Recent Approaches," (in: *The Study of Dialect: 171—197*), in: H. B. ALLEN; M. D. LINN (eds.), *Dialect and Language Variation*, Orlando, Academic P.: 35—60.
- POP, Sever, 1950: *La dialectologie. Aperçu historique et méthodes d'enquêtes linguistiques*, I: *Dialectologie romane*; II: *Dialectologie non romane*, Gembloux, J. Duculot.
- SAPIR, Edward, 1931: "Dialect," in: *Encyclopaedia of the Social Sciences*, vol. 5, New York, Macmillan: 123—126.
- 柴田武一 一九五八『日本の方言』岩波書店。
田中克彦・H・ホーレン・一九八五『現代ヨーロッパの言語』岩波書店。
- VENDRYES, Josef, 1938 (1923): (*Le langage*, Paris) 藤岡義三訳『言語学概論』凡社書局。
- VERBUNT, Gilles, 1985: *Par Les langues de France*, t. 2: *Les langues d'origine étrangère*, Paris, Centre Georges Pompidou.
- VERMES, Geneviève (ed.), 1988: *Vingt-cinq Communautés linguistiques de la France*, 2 vols., Paris, Harmattan.
- WIESINGER, Peter, 1980: "Sprache", 'Dialekt' und 'Mundart' als sprachliches und terminologisches Problem," in: J. GÖSCHEL et al (eds.): 177—198.
- WOLF, Lothar, 1975: *Aspekte der Dialektologie. Eine Darstellung von Methoden auf französischer Grundlage*, Tübingen, Niemeyer.
- WOLF, L., 1980: "Zur Definition von 'Patois' in Frankreich," in: J. GÖSCHEL et al. (eds.), 66—72.